

子どもの何を育てるのか
～「目的・方法・評価」の明確化を～

山梨日日新聞の1面には『風林火山』というコラム記事が毎日載っています。先日、目を引く内容のコラム記事を読みました。それは、ノルウェーのスポーツ政策に関するもので、子どもの何を育てるのか、それを達成するにはどのような方法をとるのか、という主旨の文章でした。次に抜粋してみます。

- ノルウェーには世界でも珍しいスポーツ政策がある。子どもの全国大会がない。国が禁じているのである。
- 同国では1976年に、子どものスポーツに関するガイドラインが制定され、子どもにとってスポーツとは“楽しむべき”ものであり“競うもの”ではないと、その目的が明確に示された。
- その内容は、12歳までは全国、欧州、世界大会への参加が禁じられていること。また、大会で賞が授与される場合は、全ての子どもが受け取らなければならないことなどである。
- 競争を禁じたことで、早期にスポーツをやめてしまう子どもが少なくなったという。
- 今年のサッカーのW杯でノルウェーのエースとして活躍したハーランド選手は、幼少期に陸上やハンドボールなどサッカー以外のスポーツに親しんだという。
- 人口約525万人の小国だが、W杯では8強入り、ミラノ・コルティナ冬季五輪では最多18個の金メダルを獲得した。
- ワールドクラスのFW（フォワード）も輩出した同国のスポーツ政策に、日本も見習うべきところが山ほどあるような気がする。

- 子どもは小さな大人ではない。すべてのスポーツは、すべての子どもに開かれていなければならない。

ここには、私が拙稿No.4「部活動は勝つことだけが目的ではない！～自主性と相手への敬意を育てる～」で述べた、部活動のあり方への一考察にも通じる考え方が示されてるように思います。ノルウェーの子どもたちへのスポーツ政策のあり方、またそのことを取り上げた山梨日日新聞に、とても共感しました。

ここでは、子どもたちがスポーツをする目的を、「楽しむものであり、競うものではない」と示しています。「競う」ことも大事ですが、その前に「楽しむ」気持ちが必要だということです。「楽しむ」というのは決して、「楽（らく）」をしてただらすることではありません。これについては、拙稿No.22「主体的な学習の推進を！～“好む＝楽しい”から“楽しむ”へ～」で書かせていただきました。

そして、その結果として、小国でありながら世界のスポーツ界で大きな成果をあげていることも注目すべき事実です。幼少期から同じスポーツだけをすることが、必ずしも良い結果をもたらすとは言えないということを物語っています。

上記の抜粋の最後に掲げたのは、記者の取材に応じた大学教授の言葉ですが、「子どもは小さな大人ではない」というフレーズが印象的です。子どもには、その時にしか経験できない貴重な時間があり、大人と同じ視点で考えてはならないという戒めだと思います。小さいときから勝利至上主義に浸らせるのではなく、いろいろなスポーツに親しむことが大切だという考え方だと思います。

ただし、これらの優れた政策が、コラム記事冒頭

に述べられている「世界でも珍しいスポーツ政策」であるというところに、スポーツ界が抱えている大きな課題があるように思います。ノルウェーの考え方は世界の標準ではないということです。日本もその課題を抱えている一国だと思います。

次に、同じような視点でもう一つ別の話を紹介します。それは、J 2 サッカーチームであるヴァンフォーレ甲府の GM（最高責任者）であった佐久間悟氏の講演記録です。その中で、氏は子どもたちをどう育てるのかについて、次のように述べています。

- 日本は世界で一番練習をしている。しかしティーチングが主。これからはコーチングを主にしていく必要がある。選手が自分で決定できない。
- 日本は親が子どもと同じ夢を見て、親が現場にのめりこむ。保護者の強い関与はネガティブである。保護者も自立を。
- サッカー界が最終的に求めるのは、子どもの自立である。監督から言われたことを、忠実にこなすだけでは駄目。自ら考えて、行動する。
- 哲学と価値観を共有すること。マネジメントの大切な点は、目的設定を明確にすること。
- プロセスを検証し管理することが大切。
- みる、わかる、きめる、うごく。
- あいさつ・礼儀作法。忍耐・我慢。相手の立場。社会性。自己の強さの認識。
- 平凡な教師は言って聞かせる。よい教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。最高の教師は子どもの心に火をつける。

このお話の中にも様々な学びがあります。

まず、日本のスポーツ指導では、子どもの主体性が育ちにくいことを指摘しています。それは指導者が教えることを主にしてしまい（ティーチング）、

支援（コーチング）が苦手だからだと言っています。サッカーの最終目標は子どもの自立だとも言っています。指示待ちではなく、自ら考えて行動する。氏にとって、そのような子どもを育てることが、指導する目的ということだと思います。

それを阻害してしまう要因の一つとして、親の関わりを挙げています。親自身が子どもと同じ夢を見てのめりこみ過ぎて、子どもの自立を妨げてしまう。しかもネガティブな面が強いと。だから、親の自立も呼びかけています。

指導面でも重要な指摘をしています。それは、目的設定と、プロセスを検証し管理することが大切だということです。目的をしっかりとって、その過程を大切にする姿勢が大事であり、子どものうちから結果だけにスポットを当て過ぎるのは危険だ、ということだと思います。

目的を明確にすること、同時にその達成のためにどのような指導をしていけばよいのか、その方法も明確にして取り組むこと、さらにその過程を評価すること。これらが非常に大事なことだと思います。

今回は二つのトピックを紹介しましたが、これらは決してスポーツ指導だけのものではなく、教育全体に関わる重要な視点だと思います。私たちに、いろいろと考える要素を与えてくれています。

（市川三郷町教育長 渡井 渡）

